

だれにも話さなかったこと

小川未明

青空文庫

あのときの、女の先生は、まだいらつしやるだろうか。それにつけ、僕は、深く心
 のこつて、忘れられない当時の思い出があります。

しばらく、さくの外に立つて、もう一度そのときのことを頭にえがき、自分の子供の時
 分をかえりみました。

どちらかといえば、僕は、内弁慶で、外では弱虫というのでしよう。幼稚園へも、
 なかなか一人ではいけなかつたのでした。

「姉さん、ついていつてよ、それでなけりや、いや。」と、いざ朝になつて、いくときに
 なると、いいはりました。

「じゃ、こんどだけ、いっしよにいつてあげましようね。」と、姉は、ついていつてくれ
 ました。

家を出ると、さびしいけれど町になります。お菓子屋や、くだもの屋や、酒屋や、薬
 屋などがあつて、角のところにある、ラジオ屋の前をまがると、細い道となります。

その道をいくと、じき、幼稚園のところへ出るのです。

門の前までくると、立ちどまつて、

「さあ、お入りなさい。姉ちゃんは、もう帰っていいでしょう。」と、姉は、いいました。もう、校舎の入り口には、きのう、いっしょに遊んだ、子供たちが二、三人もかたまつて、僕のほうを見て、なにか話しあつて、笑つています。きつと、弱虫とでもいつていたのでしよう。そう知りつつも、僕は勇気を出して、一人で入ることができなかった。それどころか、ますます、悲しくなつて、姉の手をひき、

「お姉ちゃんも、いっしょでなければいや。」と、泣かんばかりに、いいました。姉は、なんと思つたか、いやなようすもみせず、笑いながら、

「しかたがないのね、じゃ、いっしょに入りますよ。」と、いつて、門を入りました。

僕のたのみなら、なんでもよくきいてくれる、やさしい姉は、教室の中へも、いっしょに入つて、先生のお話を聞いていました。

僕たちは、教場の中で、教わるよりも、外へ出て、広場で遊んだり、うたつたりするときは、おほかた。しかし、僕には、内にいるほうが好ましく、外へ出て、みんなといっしょに手をつなぎ合つて、遊戯をしたり、うたつたりするのが、なんとなく、はずかしい気がして、好かなかつたのです。

それは、二人ずつ、ならんで、たがいに手を取りあつて、うたいながら、桜の木のまわ

りを歩いたときでした。

「ごらんない。姉ちゃんみたいなおお大きな人は、だれもはいつていませんよ。みつともないでしょう。あんたも、これからお友だちと、いつしよにならんで、お歩きなさいね。」

と、姉は、小さな声でいいました。

子供に、大人がついてきたのは、僕ばかりでなかった。ほかの子供にも、母親や、姉などが、なにぶんあがつた当座のことで、ついてきたけれど、たいていは、教室の外

にいたし、運動するときは、列の外に立つて、はなれて見ていたものです。しかるに、

僕だけは、遊戯をするにも、姉といっしよでなければ、しないといったので、しかたなく

先生もゆるして、姉は歩くとき、列へ加わりました。

その日のことを、よく覚えています。ちようど、桜の花が咲きかけていました。子供た

ちの列は、この桜の木のみわを、先生の号令に従つて、歩いたのでした。

僕は、こんなに、心のあわただしい間にも、自分の観察というものをおこたりません

でした。僕たちの、女の先生が、姉といくつも年のちがわないことを知りました。これ

は、さいしよに僕の心をおどろかした発見でした。

つぎに、姉が、先生のいわれるとおりに、僕たちといっしよになつて、歩いたり、手

をうごかしたり、うたったりしているのを見たときです。

僕は、かつと顔があつくなくて、ただこうしていては、姉がみじめな気がして、家へ帰るといい出しました。

「どうして、急にそんなことをいうの。」

姉は、あきれて、困ってしまいました。そして、僕のわがままに、どれほど苦しんだかしれぬというのは、そう暑い日でもなかったのに、姉は額ぎわに汗をにじませていたのでした。

先生の顔を見ると、僕は、いつそうだだをこねました。先生が、なにかいえばいうほど僕は、帰るといいはりました。そして、とうとうそのまま家へ帰ってしまいました。

僕は、元氣なく、だれにもなにもいわず、ただふきげんでした。

「姉ちゃんは、はずかしくって、もういつしよになんかいけませんよ。」と、姉は、家へ帰ると、この日ばかりは、おこってしまいました。

「いいよ、僕は、あしたから、一人でいくから。」

僕が、こういったとき、家の人たちは、そんな弱虫が、どうして、一人でいけるものかといって、笑いだしました。

こうした周囲しゅういの空気くうきは、僕ぼくをして、偶然ぐうぜんにも心こころに深く感かんじたいつきいを打ち明あける機会きかいをば、永えい久きゆうにうしなわしてしまつたのでした。

しかし、その翌日よくじつから、僕ぼくは、いったとおり、だれにも、送おくつてもらわず、一人ひとりで幼稚園うちえんへいき、また一人ひとりで帰かえりました。

「どうして、そんなに、強つよくなつたの。」と、家いえじゅうのものがふしぎがったり、おどろきの目めをみはつたりしました。

「きつと、いいお友ともだちが、できたのでしよう。その、お友ともだちのてまえ、お姉ねえさんに、つれていつてもらうのが、はずかしくなつたのですよ。」と、下したの姉あねが、いいました。

もとより、だれも、僕ぼくの氣持きもちちのわかるはずはありませんでした。また、僕ぼくは、自尊じそん心しんから、自分じぶんが弱虫よわむしなばかりに、姉あねをはずかしめて、氣きの毒どくに思おもつたことを、だれにも語かたる氣きになれませんでした。いつしか、月日つきひはたつてしまいました。その後ご、姉あねは、嫁よめにいつて、もう家いえにはいないのです。それゆえ、あるいは、姉あねにも、あのとときの、僕ぼくの氣持きもちちを永えい久きゆうに語かたる機会きかいはないかもしれせん。

だが僕ぼくは、あの日ひ、いっしよに遊ゆう戯ぎをしてくれた、姉あねのすがたを思おもい出だすと、これから後のち、どんな苦くるしいことにも忍にん耐たいできる氣きがする。過すぎた日ひのことを思おもい出だして、かぎり

なきなつかしさと、悲しさを感ずるのでした。僕は、いくたびも、幼稚園の、小さな校舎と桜の木をふりかえりながら、細い道を歩いて、いつしかそこを遠ざかりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

※表題は底本では、「だれにも話《はな》さなかったこと」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年7月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

だれにも話さなかったこと

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>